

ウィーン「静寂の中の荘厳」

文部科学省参与（前・IAEA 事務次長）町 末男

ウィーンを初めて訪れたのは1979年IAEA（国際原子力機関）の専門家としてであった。現在のグランドホテルウィーンの建物に本部があった。ホテル玄関の銘板に「ここにIAEAの本部あり」と刻まれている。

約一年後、IAEAの工業利用・化学課長兼RCA（地域協力協定）コーディネーターとして着任し、ウィーンに住むこととなった。IAEAの本部はすでにドナウ河の東岸に新築されたウィーンには不釣り合いの高層ビルに移転していた。私のオフィスは23階で、窓からはウィーンの森の美しい風景が望めた。

この頃のウィーン空港は小さな田舎空港だった。高速道路は無かったので、田舎道を運転して競馬場の脇を通り、前任者のファウラー氏が契約してくれていたベルベデーレ宮殿近くの古い石造りのアパートの一室にたどり着いた。古い部屋で歩くと床が軋む音がした。

しばらく単身赴任だったので、土・日は一人で近くのベルベデーレ宮殿の広い庭園を散歩する事もあった。今は見られないが、庭の中央にある滝に流れる水を前景に見上げる宮殿の姿はまことに美しく、宮殿側に立って見るシュテファン教会の尖塔を囲むウィーンの街の風景とともに深く印象に残っている。

当時は観光客も少なく、シュテファン教会もホフブルグ宮殿も黒ずんでいたが、グラーベン通りもコールマルクト通りも、ハプスブルグ家の荘厳な遺産と静寂に満ちていた。今年の7月仕事でウィーンを訪問したが、夕方少し歩いたシュテファン教会前の観光客の雑踏に閉口して早々に引き上げた。今、昔のウィーンの静かな雰囲気を楽しむには、観光客の来ない真冬の週日に散歩する事かもしれない。

私達が住んだ1980年頃は日本人会の会長はJETRO¹所長の清滝さんで、正月の新年会にはいつも「寅さん」の映画を見るのが楽しみだった。会員企業の方々の寄付による福引も呼び物だった。日本往復の航空券が当たり大喜びした事もある。清滝さんの提案で、会員が分担して「日本人がウィーンに暮らすためのノウハウ」を書いた本を作った。婦人部だった家内もウィーンの食事やレストランの事を書いた。この本は後々初めてウィーンに暮らす日本人にも大変役に立ったと聞いている。

オーストリアの魅力は田舎の美しい自然と村の佇まいにもある。ウィーンから車でドナウ河岸を1時間もさかのぼれば小さい城を中心にした幾つもの村が点在する。デュルンシュタン村もその一つで、山にある古城を散歩した後、ドナウの滔々とした流



聖シュテファン寺院

¹ 当時は、日本貿易振興会。現在は独立法人 日本貿易振興機構。

れを見下ろしながらレストランのテラスで味わう昼食は楽しみの一つだった。

仕事で印象に残っている一つは、1980-83年にIAEAから出張した東欧諸国である。鉄のカーテンが存在していた時代の、チェコスロバキア、ユーゴスラヴィア、ルーマニア、ブルガリアなど国の原子力研究所は活力が見られず、研究者の生活も苦しく、笑顔が少なかった。技術競争の無い共産主義時代は研究開発者には冬の時代だったように思われた。

二度目のウィーン暮らしはベルリンの壁が崩壊した直後の1991年から2000年までの9年間である。日本人二人目のIAEA事務次長として赴任した。イラク戦争後の核兵器問題などIAEAは世界から注目されていた。担当は原子力科学・応用局でサイベルスドルフ研究所、トリエステの理論物理研究センター、モナコの海洋環境研究所も所管していたので、職員は400人近くおり、責任の重いポストである。ツェツェバエの撲滅、品種改良プロジェクトなどでアフリカやアジアの途上国にも頻繁に出張して現場を訪ね、講演し、研究者や政府の要人と討議した。IAEA職員の仕事振りは、個人差はあるものの、使命感に裏づけられた信頼できる強固なものだった。この9年間には様々な思い出があり、国際的な人の繋がりは今も生きている。

この間にウィーンは目覚しく発展し、今も続いている。IAEAの周辺には高層ビルが林立し、商品もますます豊富になり、歴史的な建物は磨かれて美しくなった。空港は飛躍的に大きくなり、更に増設しつつある。旧市街は観光客で溢れ、安全も良く保たれている。これからの一層の発展が楽しみである。

来年は日本とオーストリアの国交が始まって140年になる、在日のオーストリア・パストル大使が中心になって様々な記念行事を企画されている。

日本人会と会員の方々のこれからの発展を心からお祈りするとともに、日本とオーストリアの関係が更に緊密になることを期待している。

「ひとこと」

日本原子力研究所で研究開発に専念していた80年、IAEAに課長として来ないかといわれた。自分の経験と知識が国際的に役立てばと考え、引き受けた。多くの途上国を回る多忙な3年が過ぎて帰国、この経験から日本政府初めての「アジア諸国への原子力協力」事業の企画・推進の役に立つ事ができた。その後、原研・高崎研究所の部長・所長になった時も多くのアジアからの研究者を受け入れて一緒に研究し、途上国の人材の育成に協力した。



再度のIAEA勤務ではブリックスとエルバラダイ事務局長のもとで事務次長という重い仕事を91年から9年間務め、相当な成果を得る事が出来た。優秀なスタッフの貢献が大きいですが、IAEA課長の経験、日本での長い研究・運営の経験も役立った。

帰国してからは原子力産業会議の常務理事、原子力委員を務め、現在はウィーン時代に作ったアジアの人脈を活用して、「アジア原子力協力フォーラム(FNCA)」の日本のコーディネーター、文部科学省参与として放射線利用・原子力発電に取り組んでいるアジアの国々と日本との協力の効果的な推進に努力している。